

授業概要

李嶠は、唐の宮廷詩壇が最も盛んで、今体詩が完成期を迎えた頃を活躍した初唐の詩人である。彼の詠物詩百二十首は『百詠』ともいい、『千字文』『蒙求』『和漢朗詠集』と共に平安以降の知識階級にとって必読の幼学書であった。この授業は『百詠』の詩を一回に一首ずつ味読していくことによって、中国伝統文化の中の古典詩の意味と作法について考えてみる。

授業計画

第1回	中国古典詩における唐詩及び『李嶠百詠』を概説
第2回	「詠笛」を読む
第3回	「詠笙」を読む
第4回	「詠歌」を読む
第5回	「詠舞」を読む
第6回	「詠珠」を読む
第7回	「詠玉」を読む
第8回	「詠金」を読む
第9回	「詠銀」を読む
第10回	「詠銭」を読む
第11回	「詠錦」を読む
第12回	「詠羅」を読む
第13回	「詠綾」を読む
第14回	「詠素」を読む
第15回	「詠布」を読む
第16回	復習と総まとめ

到達目標

初唐に完成した近体詩及び詠物詩の作法と内容を通して、中国古典文学における詩の意味について理解を深める。

履修上の注意

テキストはプリントを使うので、履修者は毎回出席してメモをとることが必要である。

予習復習

この授業はプリントを使うので、プリントと授業中に取ったメモの整理、復習が大切である。

評価方法

履修の態度と練習、期末試験によって総合的に評価する。

テキスト

プリントを使う